

そして、花笑む

2018/07/16
ver. 3.5

夜、山中にて

森の中を駆け抜ける由花 SE: 葉が擦れる、走る、鳥の鳴き声

由花 「(息を切らし)なんでもっ…どうして…!!?」

SE: 葉が擦れる

妖達 「人間だあ〜!!」「タバタイ!タバタイ!」「ま〜て〜!」など

SE: 獣の声

由花 「っ!!」

由花(〽) 「一体なんなのよー!!」

M: OP 曲

回想・中学の教室にて

M: 日常的なほんわか系

先生 「よしお前たち、今週末は山で自然学習という名のハイキングだぞー」

生徒達 「はーい」

先生 「この日の授業はなしだぞー、嬉しいかー?」

生徒達 「はーい♪」

「変わりに週明け小テストやるぞー」

生徒達 「ブーー!!」

SE: 場転(ポップ系)

山道にて/SE: セミン、歩く

由花 「今時、中学生が山でハイキングってありえないよね?どうせなら、遊園地とかに行きたかったー」

美紗季 「遊園地はここから遠いしねー。それに、この山は歴史深い所だから」

由花 「(遮って)あ!休憩っばいよ!」

美紗季 「…聞いてないねー」

由花 「美紗季、私トイレ行ってくるー」

美紗季 「いつてらっしやーい」

歩いているうちに、いつの間にか暗い山道へ入ってしまう由花(〽): 草を踏みしめる

由花 「おかしい…トイレに向かっているはずなのに、トイレが見当たらない…人も見当たらない…。(立ち止まって)これって迷子…?」

再び歩き始めた途端、葉で隠れていた崖から足を踏み外す(SE)…転げ落ちる

由花 「え…つきやあああ…!!」

SE…転げ落ちる

由花 「い、いたたた…リュックのおかげで助かった…。でも、こんな高さ登れないよ…。(人影に気付く)はっ!」

SE…草をかきわける

由花 「すいませーん!おじさん?お婆さん?わかんないけど、道教えてくださーい!」

由花が近付くと人影が振り向くが、その姿は異形のもだった。

SE…不気味に首が動く音

由花 「…え?」

回想終了

妖達 「ま…で…!!」

由花 「あ…!!もう何なの!?なんで追っかけてくんの!?!」

SE…走る、妖のうめき

由花 「ていうか、あれなに!?!」

由花 (SE) 「あ、あそこ!?!」

大きな木の根元に身を隠す

由花 「っ!?!」

妖1 「ドコヘイッタ…」

妖2 「人間、食べたい」

妖3 「ワシは足からいこうかの」

由花 (SE) 「早くどっかいつてよ…」

妖4 「(匂いを嗅ぎ)におう、うまそうな匂いがする…。ここか?」

由花 「っ!?!」

森の中からテンが飛び出す(SE)…葉がこすれる、羽音(バタパタ)、デフォルトされた飛び出し音

テン 「おまえら…!鎮まりやがれい!!!」

由花 「え、スズメ!?!」

テン 「おやびーん!こっちです!」

テンがきた方から、天狗・イブキが空を切って飛び出す(SE)…葉がこすれる、大きな羽音

イブキ 「たくつ、こんな時間に仕事増やしてんじゃねーよ!!」

翼から生まれた巨大なつむじ風に妖が吹き飛ばされる中、その風に由花も巻き込まれる(音…妖うめき、強風)

由花 「え、えええ〜!?」

イブキ 「ん？なにか今聞こえたか？」

テン 「さあ？」

音…強風、枝が折れる、落ちる

由花 「うぐつ…今日落ちてばっか。なんか柔らかいものの上に落ちたような…」

SE…妖うめき

由花 「あ、あははは…すいません、決してわざとではなく…。(後ずさり)お休み中、すみませんでした〜。私はこれで失礼しますっ!」

SE…妖うめき複数

由花 「!!か、囲まれてる!?まさかここって化け物の巣!？」

妖♫ 「嬉しや、人の子じゃ」

妖♫ 「タベタイ…」

妖♫ 「腸(はらわた)はワタシにおくれ」

由花(音) 「私、ここで死ぬ!？」

由花 「そんなの…イヤー!!!」

つんざくような笛の音が鳴り響いた途端、苦しみ始める妖達(音…笛の音)

妖達 「(苦しむうめき声)」「」

妖∞ 「この笛の音はっ…」

妖♫ 「守人(モリビト)じゃ!」

妖10 「オノレ、イマイマシイ!!」

笛の音から逃げるように散っていく妖達。目を恐る恐る開ける由花

由花 「…あれ？逃げた？(自分の両手をみつめ)まさか、私にこんな隠された力があつたなんて…」

ハル 「そんなわけないだろう」

由花 「え?」

後ろからの声に振り向く由花。少し高い位置から由花を見下ろすハル

SE…風が吹き抜ける音…静かな和風

由花 (S)
「そこに立っていたのは、私と同年くらいの少年だった。でも、肌も髪も透けるように真っ白で、その姿は妙に現実感がなくて……。人形のように整った顔の中で、こちらをまっすぐ見つめるその黒い瞳が、私をその場に縛り付けたのだ」

2.

感じの悪いあいっ

SE: そよ風、鼻の鳴き声

ハル 「どこから入って来たの？」

由花 「え？」

ハル 「一体、どこからこの森に入ったのかって聞いてるんだけど」

由花 「あ、えっと、山でハイキングしたら、トイレ見つからなくて…確かおじさんかおばさんに声を…あー！それで、そしたら首がぐりんてなって、その後も牙生えてたり、目玉グリグリだったり、お化けみたいなのっ」

ハル 「(遮って)もういいよ。何を言ってるのか全然わからないけど、状況は大体わかったから」

由花 「(ベンをかきながら)うえ？」

ハル 「ついてきて。出口まで案内するから」

由花 「本当!？」

ハルの背を追って走り出す由花 SE: 歩く

由花 「ま、待ってよ!!」

山道にて

どンドン歩き進めるハル。足下の突き出る木の根に躓きながらも追う由花 (S): 歩く、葉や枝を踏
みしめる

由花 「うわっ! あーもう、あいつ歩くの早すぎ…。草履なのになんで？」

由花 (S) 「ていうか、こんな森の中を着物って…」

由花 「ねー待ってよー!!」

ハル 「…」

由花 「あんたは慣れてるかもだけど、こっちは山も森も初心者なのよ？」

ハル 「…」

由花 「この調子じゃはぐれて、今度こそ遭難しちゃう」

ハル 「…」

由花 「そうだったら、多少はあんたにも責任があるでしょ」

ハル 「(後ろを振り返りながら)あの子、口じゃなくて足を動かしてくれ。それと、曲がりな
りにも僕は君の命を救った。そんな相手に対する口のきき方としては、不相応だと思っ
て？」

由花 「なによそれ」

ハル 「ついでに言っておくけど、あんまり大きな声を出していると、さっきのが集まってくるよ」

由花 「それ先に言っただよ！」

何事もなかったかのように先へ進むハル<SE:歩く

由花 「…感じわるー」

ぶつぶつ言いながらもハルの後を追う由花<SE:歩く

そこから歩いて少し開けた場所に出る。月光の下で朽ちかけている鳥居が立っている

ハル 「ついた」

由花 「(膝に手をつき)はあ、はあ…ついたって？」

ハル 「ここを通過して真っ直ぐ歩いていけば、君のいた所に帰れるよ」

由花 「帰れる！？やったー！！(駆け出そうとして立ち止まる)っと、スルーしそうだったけど、
ここってどこなの？さっきのはなに？あんたは…」

ハル 「いまここを通らないと帰れないよ」

由花 「な、なんで!？」

ハル 「帰りたいの？帰りたくないの？」

由花 「帰りたいに決まってるでしょ!…ここを通ればいいのね？」

ハル 「そう」

由花 「…っ!」

鳥居の下を通ろうとした瞬間、透明な壁のようなものにぶつかる<SE:歩く、激突

由花 「うぐ!!くうーいったー…。なんなのよ、もう」

ハル 「なに遊んでるの？」

由花 「遊んでない!何かにぶつかったの!!」

ハル 「ぶつかった？」

由花 「そう!なんか、かったい壁みたいなの!」

ハル 「(何かに集中している)…。もう一度行ってみて。大丈夫なはずだから」

由花 「(小声)…本当かな? じゃあいくわよ」

SE:歩く、激突

由花 「ぐう!! やっぱりあたった〜…」

ハル 「おかしいな、ちゃんと開けたのに」

由花 「(おでこを摩り)ねえ、通れないんだけど、どういうこと？」

ハル 「…君さ、帰りたいって言ってたけど」

SE: 風が吹き抜ける

ハル 「本当は帰りたくないんじゃない？」

由花 「何言ってるの、そんなわけないじゃん。あんな化け物に襲われて、怖いおもいして…今すぐ家に帰りたいわよ!」

ハル 「現世(うつしよ)への門は開いている。だけど君は通れなかった。君自身に現世への執着がないのか、それとも拒絶しているのか」

由花 「なに、うつ、しよ？」

ハル 「ここは、さつき君が見た妖達が跋扈(ばつこ)する、現世と常世(とこよ)の間『狭間の森』。つまり、ここは君のいた世界じゃない」

由花 「はさまの…ええ？」

ハル 「つまり君、死にかけてるんだよ」

由花 「…え」

SE: 風が吹き抜ける SE: 和風

由花 (S) 「明日の天気でも言うように、感じの悪い少年は、私に事も無げに言った。だけど、重すぎる意味を持つ言葉を理解することが、その時の私にはできなかった」

3.

黒い翼のあんちゃん

由花 「死にかけてるって、どういうこと？」

ハル 「言葉通りの意味だよ。ここは君がいた現世と隔絶された場所。本来は人が立ち入ることはできない。そうだね、限りなくあの世に近い場所、って言えば理解できる？」

由花 「人は入れないって、あんたいるじゃない」

ハル 「僕は人じゃない。妖だ」

由花 「さつきの化け物と一緒にすること!？」

ハル 「(むっとして)あんな低俗なのと一緒にしないでくれる。あれらと存在してる月日も力も知能も全く違うからね」

由花 「…ちよっと、何がなんだかわかんないんだけど…」

ハル 「とりあえず、このままここに居続けると、君は人ではない存在に近付いていく。実質それは現世での死、ということだね」

由花 「すぐくヤバイ状況なのはわかった！！私これからどうしたらいいの!？」

ハル 「僕に聞かれてもね。君みたいなのに遭遇するの初めてだし。まあ君の幸運を祈っているよ、それじゃ」

森の方へ歩き出すハルの腕に縋り付く由花<囁…歩く、掴む

由花 「ちよつと！ここに置いてくの!？」

ハル 「っ！なに、重いんだけど」

振りほどこうとするハルと必死に縋り付く由花

由花 「助けてよ！困ってる人を見捨てんの!？」

ハル 「僕が君を助ける義理なんかないだろっ」

由花 「お巡りさーん！ここに人でなしがいます！逮捕してくださいー!!」

ハル 「妖だつて言ってるだろっ」

頭上を大きな影が通り、空を見上げる二人<囁…羽ばたき音

由花 「今度はなに!？」

ハル 「…うるさいのが来たな」

空から降り立つイブキ<囁…下駄で着地

イブキ 「おーい、少年。お前さんの方は片付いたのか？」

ハル 「当たり前だろ」

由花<囁 「え、背中から翼生えてる!？」

イブキ 「そう怒るな怒るな。確認てやつだろ。ん？」

ハルの後ろにいる由花を見つけるイブキ。ハルが握られている腕を振りほどいた勢いで、前へ飛び

出して転ぶ由花<囁…転ぶ

ハル 「っ」

由花 「うわ!…つなにすんのよ!」

イブキ 「ん…?」

由花の顔を覗き込むイブキ、それに怯える由花

由花 「ひっ!」

イブキ 「…こりゃあ驚いた。人間じゃねえか。一体どういうことだ、ハル」

ハル 「はあ、説明するの面倒くさいな」

イブキへこれまでの経緯を説明するハル

イブキ 「はあーなるほどなー」

ハル 「で、絡まれて困ってたってわけ」

由花 「それはあんたが置いていこうとするから！」

イブキ 「お嬢ちゃん、迷魂(めいこん)っていう状態だな」

由花 「めいこん？」

ハル 「浮かばれずに迷っている靈魂、魂のこと」

由花 「魂…まさか私も死んでるの!？」

イブキ 「あー違う違う。常世の存在、それに近い妖、俺たちはお前さんたち人間と違って肉体からじゃなく魂から生まれる。それが年月を経て、力を得てくるとそれぞれの形を成す。魂の器、つまり肉体だな」

由花 「はあ」

イブキ 「ピンときてねー顔だな。うーん、ざっくり言うとなんか俺たちの本質は全て魂。そんな俺たちがある常世、そしてこの『狭間の森』は、その魂のあり方をまざまざと浮き彫りにする」

由花 「…」

イブキ 「つまり！嬢ちゃんの魂が、現世へ帰ることを望んでいない！そのせいで嬢ちゃんは現世の門である鳥居をくぐれなかったっつーわけよ」

ハル 「迷える魂ね…」

イブキ 「そして、ここは現世とは違う理(ことわり)だ。あんまり長くいると、こっち側によってさちまう」

由花 「それってつまり」

ハル 「妖になる。それは人としての死だ」

由花 「私があんな化け物になるの!？」

イブキ 「どんな姿形になるかは、なってみないとわかんねえな。意外と可愛らしいかもな」

由花 「そんなのイヤー!!」

イブキ 「落ち着け落ち着け。さっき言ったろ。嬢ちゃんが現世へ帰ることを望んでいないから、鳥居をくぐれなかった。それなら通るには？」

由花 「…帰りたいと望む？」

イブキ 「せーいかーい♪」

由花 「望んでる！今まさに！本気で！心の底からー！」

イブキ 「だけど嬢ちゃんの魂は望んでいない。魂はその存在の本質。自分自身で気付いていない本心があるんじゃないか？」

由花 「(脱力してへたり込む)…なにそれ」

イブキ 「まあ一日や二日で妖になるわけじゃないから、ハルの所で原因探してみたらいいんじゃないか？」

ハル 「ちよつと、なんで僕の所なの」

イブキ 「えーだつてお前『守人(もりびと)』だろ？これも仕事だつて」

ハル 「あなたもその守人だろ。だつたら、あなたが面倒みればいいじゃないか」

イブキ 「俺の住処は手狭だもーん。その点、お前の庵は空いてる部屋あるしな。それに見た目だけとは年代のお前の方が、嬢ちゃんもいいだろ」

ハル 「僕に面倒ごとを押し付けてるだけじゃないのか」

イブキ 「お前さー嬢ちゃんあの顔を見ても同じこと言えるか？」

二人の言葉が耳に入らないほど、呆然としている由花

由花 「お母さん…俊(すぐる)…会いたいよ…」

SE:回想音(短く)

?? 『…が終わつたら、またハルに会いたいな——』

ハル 「…」

イブキ 「おー泣くな泣くな。目が腫れちまうぞー」

由花 「うゝゝっ!」

ハル 「…庵に置くだけだから」

イ・由 「ん?」「え?」

≪和風≫

ハル 「君を僕の庵に置いてあげる。だけど、その原因というのは自分で探して」

イブキ 「ハル君、冷たいとおもいまーす」

ハル 「それが嫌なら他をあたるんだね」

森の方へ歩き始めるハルの背をみて笑うイブキ(短く)…歩く

イブキ 「素直じゃないねー。よかつたな嬢ちゃん。これで寢床は確保だ。俺の所はちつと人間の子にはいい環境じゃねえからな。よかつたよかつた」

由花 「あ、りがとうございます?」

イブキ 「おう。俺にできることなら何でも協力するからな。つと、まだ名乗ってなかつたな。俺は狭間の森・守人、天狗のイブキだ。嬢ちゃんは?」

由花 「安宅由花」

イブキ 「よろしくな」

由花 ☹️
「握手を交わしたその手は温かくて。私と同じ体温があるこの人も妖というのが信じられなかった。でも、その背中から生える黒い翼はまぎれもなく本物で、やっぱり人間じゃない。ここは別の世界なんだと、私にまざまざと突きつけていた」

4

トラブルメーカーズズメ

由花の夢の中にて

母 「ただいまー。あ、夕ご飯作ってくれたの？んー美味しそう！」

由花 「お母さん…」

弟 「あとちよつとでこのステージ終わるから！そしたら宿題やるから！！」

由花 「俊…」

美紗季 「由花ちゃん、高校はどこにするの？どうせなら一緒に所行きたいね」

由花 「美紗季…。みんなが待ってる、早く帰らなきゃ…」

ハル 「ここは狭間の森。君のいた現世じゃない」

イブキ 「あんまりいると妖になっちまう」

由花 「帰らなきゃ！」

ハル 「君自身が現世へ帰ることを望んでいないんだ」

由花 「そんなことない！！」

由花が目を覚ますと、和室の部屋に敷かれた布団の中。SE：布団から飛び起きる

由花 「はあ、はあ、ゆめ…？」

SE：襖が開く

ハル 「とつくに陽はのぼってるんだけど。寝るのが仕事じゃないんだから、さっさと起きてくれる」

SE：襖が閉まる

由花 「夢じゃなかった…」

ハルの庵・居間にて

SE：廊下を歩く、襖を開ける

由花 「あ」

イブキ 「よ、おはようさん。よく寝れたか？」

由花 「一応。えっと、イブキさんはどうしてここに？」

イブキ 「嬢ちゃんに会いにきたんだよ」

由花 「私に？」

イブキ 「そう。そんな所に突っ立ってないで、ここに座んな」

SE：襖を開める、畳に座る

由花 「？これ…」

由花が座った所に質素なご飯が置いてある

イブキ 「その朝飯は少年が作ったやつだよ。俺もさっきいただいたけど、食べられない味じゃないぞ。修行僧みたいに質素だけどな」

由花 「食べていいの？」

イブキ 「少年が嬢ちゃんに用意したもんだよ」

由花 ☹️ 「あいつ意外と優しいのかも…」

SE：襖開閉

ハル 「まだ食べてないの？そんな鈍間（のろま）だから、異界に迷い込んだりするんだよ」

由花 ☹️ 「やっぱり感じ悪い！」

由花 「いただきます！」

食べ進める由花

由花 ☹️ 「うーん、まずくはない、美味しくもないけど」

ハル 「文句あるなら食べなくていいんだけど」

由花 「なにも言っていないじゃん！」

イブキ 「あっはっはっはっ！嬢ちゃんは顔に出るタイプだな」

由花 「(咳払い)そういうえば、妖もご飯食べたりするんだね」

イブキ 「肉体がある妖はな。ただ何を食うかは千差万別だ。俺たちは比較的人間に近い姿形をとってるから、人と同じもの食ってるって感じだな」

ハル 「昨日、獣のような妖がいたろ。ああいうのは、やはり獣のような生活を送ってる」

由花 「ふーん。でも、その中に人間っぽいのもいたじゃない？なんか色々違ったけど…。なんで私を食べようとしたわけ？」

ハル 「人の味をおぼえてしまったのさ。あれは一種の共食いなんだよ」

由花の食事の手が止まる

由花 「共食い？」

イブキ 「昨日嬢ちゃんを襲った妖たちの体、大なり小なり崩れてたり、異様な形になってたろ？あいつらのほとんどは人から生まれたんだ」

ハル 「正確には人の負の想い、からね」

イブキ 「人の憎しみや恐怖、嫉妬、そういった負の想いが寄り集まって形を成したものが、昨日のあれ。自我もあやふやで、自分の形もしっかり保てない危うい存在さ」

由花 「…それがなんで人を食べるの？」

イブキ 「大本は負の想いだって言ったろ？そういったものは、得てして攻撃的になる。己の中に渦巻く負の想いが破壊衝動になっていく」

ハル 「あれは常に飢えているんだ。そうして周りを襲っていく中で、人の味を覚えた」

イブキ 「血肉をすすする美味さっていうよりも、襲ったときその人間が抱く負の想いごと食らうのが、あいつらには美味いらしくてな」

由花 「うえ…」

テンが襖を突き破り入ってきてイブキにへばりつくSE:襖突き破る、へばりつき

テン 「おやびーん！やつと見つけやしたー！！なんでおいらをおいていくんすかー！！」

イブキ 「すっかり忘れてたわ」

テン 「そんな！！おいらがどれだけ大変な思いでここまで来たかっ！！」

ハル 「ちよつと、襖は突き破るものじゃないんだけど」

テンの姿を見て、昨日の吹き飛ばされ事件を思い出す由花

由花 「そ、それ…」

イブキ 「こいつは小天狗のテン。うるさくてすまねえな」

由花 「スズメー！！」

イ・ハ 「はあ？」

三人に昨日のいきさつを説明する由花

イブキ 「吹き飛ばした妖の中に嬢ちゃんがあったとは…いやーすまん！」

ハル 「というか、昨日イブキに会った時点で気付かなかったの？」

由花 「だって、イブキさん空飛んでたし、それよりも、こつちのスズメの方が目について…」

テン 「おいらはスズメじゃねー！いいか小娘！おいらは親びんの子分兼一番弟子！そして、親びんたちと同じくこの『狭間の森』の守人でい！どうだ恐れ戦いたか！」

由花 「(イブキに)守人って？」

テン 「おいムシすんな！」

イブキ 「昨日みたいな危なっかしい妖を鎮めたり、森の中の異変なんかに対処したり。読んで字のごとくこの森を『守る人』さ」

ハル 「ねえ、わざわざ小天狗を呼んだんだから、さっさと用件を済ませなよ」

イブキ 「そうだったな。テン、嬢ちゃんにこの森を案内してやりな。もちろん、あぶねー所は避けるよ」

テン 「なんでおいらがこんな小娘を…」

イブキ 「お前ヒマだろ？」

テン 「ヒマじゃねーです！おいらには親びんの後をついて回って、親びんの仕事を補助するという大事なお役目が…」

ハル 「(遮って)補助じゃなくて、お荷物だろ」

テン 「このクソガキー！！」

イブキ 「これも立派な仕事だ。それに…(小声で)嬢ちゃんにちゃんと謝るんだぞ」

由花 「？」

テン 「むぐぐ…」

イブキ 「とまあ、嬢ちゃんが帰るには、迷魂になつてる理由を見つけなきゃならん。それまで無闇にうろろして危ない目にあわんためにも、この森の地理は把握しておいた方がいいぞ。ほら、テン」

テン 「わかりましたよ…。おい小娘、おいらについてこーい！」

障子を突き破って飛び出すテンの後を追う由花(SG)襖を突き破る

由花 「あ、ちよつと、待つてよ！ イブキさん、色々ありがとう！」

SG…襖開閉、廊下を走る

ハル 「守人だからって、僕たちがここまで面倒みる必要ないと思うけど」

イブキ 「ほー？寝床や食事まで用意しちゃって、お前さんかいがいしく世話してるじゃねえの」

ハル 「…」

イブキ 「いやー朝来るとき勇気いったんだぞ？若い男女が一つ屋根の下、過ちが起きてたらどうするかーって！そのときは年長者として、説教の一つでもしてやらなきゃな」

懐から横笛を取り出し、吹くハル(SG)笛の音

ハル 「(息を吸う)」

イブキ 「だあー！！！！いてえっ！それやめろー！！(笛の音がやむ)…はあ、はあ…」

イブキの前に仁王立ちになるハル(SG)…不穩、怒り

ハル 「イブキ殿は無駄口を叩ける程、おヒマなようで丁度良かった。小天狗殿が開けていった襖の大穴、修繕よろしくお願いします」

イブキ 「な、なんで俺が…」

おもむろにまた笛を取り出すハル

ハル 「(息を吸う)」

イブキ 「わかった！やる！！やらせていただきますー！！」

森の中に

どんどん進んでいくテンに必死でついていく由花<音>：森の梢、鳥の鳴き声、羽音

テン 「んで、こつちが双子ババアの住処。人間を食うことはねーけど、薄気味悪いババアで何するかわかんねーからな。近付くなよ」

由花 「はあ、はあ。あんたね…進むの早すぎ！あんたは飛んでるからいいけど、こつちは徒歩なのよ！？」

テン 「だらしねーな！しゃきつとしろい！」

由花 「こつちは女子なのよ？もうちよつと気を使いなさいよ」

テン 「はん、おいらが好きなのは婀娜(あだ)っぽい姉さんだ！お前みたいなるぺたまな板おんな…」

由花に顔を掴まれるテン<音>SE：掴む

由花 「なんだって…？」

テン 「むぐぐ、お前みたいな凹凸のない小娘なんて女じゃつぶう！」

おにぎりのように両手でにぎにぎされるテン<音>SE：握る

由花 「このっ！態度だけはビッグサイズね！」

テン 「おい！ こら！ やめろー！」

SE：風の音、鈴の音

由花 「ん？なんの音」

鈴の音がした方へ歩くと開けた場所に出る。奥には石階段があり、静謐な空気が漂う<音>SE：歩く、草をかきわける<音>：静謐系

由花<音> 「なんだろう…ここすくく静か…」

由花 「階段？ 上に何かあるのかな？」

階段に足をかけようとした瞬間、手の中のテンが抜け出す

テン 「ぶはっー！お前おいらを殺す気かー！？」

由花 「あ、ごめん、忘れてた」

テン 「それに、ここは主さまの領域だ！お前みたいな人間が、おいそれと入っていい所じゃないー！」

由花 「主さま？」

テン 「主さまは、この森を治めるすんごい妖で、おいらたち守人の元締めだ。つまり大親びんだ」

由花 「へー、どんな妖なの？」

テン 「はるか昔から生きるつよい妖で、何より！すごい色っぽい姉さんよ！…だけど怒らせたらすげー怖いぞ。おいらなんか、何度も丸焼きにされかけたぜ…。せいぜいお前も気をつけるよ」

由花 「…そんなにすごい妖なら私が帰れないの、何とかできないかな」

沈む由花の顔を伺いつつ、近くにある大きな岩に降り立つテン<SE>羽音、着地音

テン 「…お前がこつちに來ちまったのは、多分おいらのせいなんだ」

由花 「え？」

テン 「あの夜――」

回想・夜の森にて

テン 「風乱瞬滅波！いまいちだなあ…。牙迅殺絶風！もつとこう、女子がきやーきやー言う感じがいいんだけどな。よし、これならどうだ！旋羅翔牙疾！！」

テンのつむじ風が木の影で寝ていた妖にあたる<SE>小さい風、ぶつかる

テン 「あ…」

<SE>獣のうなり声、咆哮

テン 「きよー！お助けー！！！」

回想終了

テン 「んで、そいつをやり過ごそうと門を開いて、現世に逃げ込んだんだ。そしたら、そいつも入っちゃったみたいで…」

由花 「はあ…」

テン 「おいら全然気付かなくて…。妖を撒けたと思って森に戻ったけど、その後別の妖が騒ぎを起こして、おいら門を閉め忘れたんだ」

由花 「へえ…」

テン 「それで、おいらが閉め忘れた門をお前が通っちゃったんだ」

由花 「…」

テン 「なんで帰れないのか、おいらにはわかんねえ。けど、お前がここに來ちまった原因はおいらだ！本当にすまねえ！」

岩の上で小さく土下座するテン

由花 「はあ〜。そんなに小さくなられたら怒れないじゃん」

テン 「う？」

由花 「もーしようがない！」

テンを手を取って、またおにぎりの刑<SE>にぎる

テン 「ぬお!? むぎや!!! ぐえ!!! ぐうぐやめろー! おいら窒息するぞ!」

由花 「あははは、ごめんごめん。これで許してあげる」

テン 「え?」

由花 「まあ腹が立つつちやあ立つんだけど、過ぎたことだしね。それに悪いことしたって、反省してるみたいだし」

テン 「…いいのか、もしかしたらお前このまま…」

由花 「そのかわり、私が帰るために協力してね、テン」

テン 「いきなり呼び捨てとは失礼だぞ小娘ー!」

由花 「いいじゃない、減るもんじゃないし。私は安宅由花。よろしくね」

手を差し出す由花。それに応えて握手するテン

テン 「おう。おいらが協力してやるから大船にのったつもりでいる、ゆうか!」

由花 (〽) 「ここがどこか、彼らは何者か、どんなに説明されても不安は拭えなくて。でも守人だというこの妖たちのおかげで、私は立っていられたんだと思う。必ず帰る。家族や友達がいる私の世界へ」

5.

月夜の下であなたと

少年の庵・台所

かまどの前で火をおこすため、灰をかき出す由花。灰が舞い上がりむせる

ハル 「そんなの言われなくてもわかるよ」

由花 「くっ…！」

由花 ㊄ 「ダメだ、ダメだ。こいつの嫌みをいちいち真に受けてたら、身が持たないぞ…」

由花 「運動部だから体力には自信ある。あと家事全般できる」

ハル 「じゃあよろしく」

由花 「へ？」

あくびをかみ殺すハル

ハル 「家事得意なんだろ？僕はこれから寝るからよろしく」

由花 「え、まさか全部！？」

SE：ふすま開閉

回想終了

廊下にて

雑巾がけをしている由花 ㊄ SE：雑巾がけ

由花 「くそー寝る所もご飯ももらってるから文句言えない！よし、あとは洗濯とご飯！…あれ、そういえばこの家…」

ハルの自室にて

ハル 「せんたくき？」

由花 「そう。洗濯したいんだけど」

ハル 「そんなもの知らないな」

由花 「はあ？」

ハル 「それは現世のものだろう。ここにはないよ」

由花 「じゃあどうしてるの？」

ハル 「川」

由花 「は？」

天の声 「昔々ある所に、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに。おばあさんは川へ洗濯に。おばあさんは川へ洗濯に。おばあさんは川へ洗濯に——」

川のほとりにて

ものすごい勢いで洗濯をこなす由花 ㊄ SE：力強く洗う、川のせせらぎ

由花 「このー！今時手洗いつて昔話かつつーの！（洗濯物を広げて）どーだー！はあ、はあ…まあこんなもんでしょ」

台所にて

時代劇を彷彿とさせる台所に立ち尽くす由花

由花 「問題はご飯ね。これってかまどっていうの？どう使うのよー…」

窓の隙間からテン登場/SE：羽音

テン 「おーい、ゆうか！テンさまがじんちゅーみまいにきてやったぞ！」

由花 「ちよūdい所！」

テン 「うん？」

ことの顛末をテンに説明する由花

由花 「ということなんだけど、この台所の使い方わかる？」

テン 「ふふふ…。日々、親びんが台所に立つお姿を後ろから見守るおいらに！わからないことなんてないぜい！」

由花 「あんた手伝わないの？」

イブキ 『おめえは役に立たない所か、余計な仕事増やすから何もするな。そこで息だけしてろ』

テン 「って親びんが…」

由花 「なんか、ごめんね」

そして冒頭の時間軸へ

テン 「灰かき出して薪入れれば使えるぞー」

由花 「この家結構きれいなのに、ここだけなんで掃除されてないのよー」

テン 「ぼーずは火が苦手だからな」

由花 「えー、でもお風呂の釜とか、夜に使う行灯だっけ？あれ使ってるよ」

テン 「近くに寄れないから、つけたらそのまま消えるまで放置だろ」

由花 「あぶな！でもなんで？」

テン 「そりゃ、あいつが桜の木の化身だからだろ。木の天敵の一つは、火だからな」

由花 「そうなの！？」

テン 「お前しらなかったのか？」

由花  「そう思えば、あの髪と肌の白さ、桜の花みたいいなー」

テン 「お、後は火をつけるだけだな」

近くに置いていたマッチ箱を手取る由花/SE：マッチ箱

由花 「なんかさ、洗濯機とかはないくせに、こういう古いものはちよこちよこあるよね。あとミソとかお米とか。農家してる妖でもいるの？」

テン 「そういうのは、たまに親びんがいまのじよーせーっていうのを確かめるために、現世に行ったとき持って帰ってきてくれるんだ。便利だから、妖達からもちよーほーされてるぞ」

由花(≡) 「お金持ってなさそうなのに…。まさか盗んでるんじゃない？」

テン 「おい！早くしないと陽が暮れるぞ」

由花 「やばー！」

夕暮れ時・居間にて(SE: 食器の音)

由花 「ふうーなんとかが飯とおみそ汁はできた」

テン 「おいらにもあるんだろうな？」

由花 「もちろん食べていきなよ」

テン 「よーし！夕飯だつてぼーず呼んでくるぞー！」

飛び出すテン、丁度襖を開けたハルの胸にぶつかり落ちる(SE: ぶつかる、襖を開ける)

テン 「ぶぎゃ」

ハル 「騒がしいと思ったら半人前天狗がいたんだ」

テン 「誰が半人前だ！」

由花 「丁度よかった、夕ご飯できたよ」

座敷に座る三人、配膳に目を惹かれるハル

ハル 「これ…」

由花 「テンのおかげで台所のかまど使えたから、ご飯とおみそ汁作ってみたの」

テン 「おいらのおかげだ！」

ハル 「みそ汁、これが」

由・テ 「いただきますー♪」

ハル 「いただきます」

テン 「ゆうかー飯なかなかうまかったぞー！また食わせろー！」

由花 「気をつけてねー」

テンを見送った後すこし気まずそうにハルの正面に座る(SE: 羽音、襖しめる、座敷に座る)

由花 「…あのさ、ご飯結構芯が残ってたでしょ？ごめん！かまどで炊くの初めてで、お水の量とかよくわからなくて…」

ハル 「いや、おいしかったよ。とくにみそ汁。初めて食べた」

由花 「そうだったの？そう言ってもらえて、よかったよ」

ハル 「昔、白いご飯とみそ汁が最高のご馳走だって言ってた人がいて。こういう味だったんだなって」

昔を懐かしむようなハル

由花 「…」

ハル 「——確かにおいしかったよ」

由花 (SE) 「いま、笑った…？」

由花 「あ、そ、そのおみそ汁、お母さん直伝なんだよね！うち父親いなくてお母さんが働きに出てるから、私にご飯作ったりしてるんだけど、おみそ汁に関してだけはうるさくてさ。おいしいって言ってもらえるまで大変だったんだ」

ハル 「家族か…。他にはいるの」

由花 「弟がいる。三つ下で、もうやんちゃでうるさくて。あ、その辺テンに似てるかも」

ハル 「離れると恋しいもの？」

由花 「恋しい…どうだろ。二人とも自活能力ゼロっていうか、本当家のことなにもできなくて、それが心配かな！」

SE:ノスタルジック系

母 「由花のご飯おいしー！食べると明日もがんばろーって思えるの」

由花 「私が帰った時、家がすごいことになってそうで」

俊 「ねえちゃん！靴下片方みつかなーい！どこにあるか、あ、ごめんあった」

由花 「だからっ早くっ…家に帰らないとっ…」

涙が止まらず思わず顔を伏せる由花

ハル 「…泣ける時に泣いておいたほうがいい。じゃないと、涙が存在する意味がない」

由花 「っうん…！」

由花の部屋にて

布団の中でなかなか寝付けずにいる由花 (SE:布団で寝返り)

由花 「うゝさつき散々泣いたせいか寝れない…」

ハル 『…泣ける時に泣いておいたほうがいい。じゃないと、涙が存在する意味がない』

由花 (SE) 「あんなことも言うんだ…」

由花 「…ダメだ、水でも飲もう」

寝ることを諦め、部屋から出て台所に向かうSE…起き上がる、襖を開閉、廊下を歩く

由花 「うん？」

月明かりで照らされる縁側で横笛を吹くハルSE…笛の音

由花 「本当に黙ってればキレイな人だな（笛の音止む）…あ」

ハル 「覗かれるのは好きじゃないんだけど」

由花 「ご、ごめん。こんな時間に練習？」

ハル 「練習じゃなくて、妖を追い払ってる」

由花 「その笛で？」

ハル 「…」

由花 SE 「あ、これ絶対説明するの面倒なんだ」

由花 「お邪魔しましたー」

ハル 「この笛は、ご神木を削って作られた笛なんだ。だから、この笛の音には邪を払う力がある」

由花 「その笛を吹くだけで、妖を追い払えるの？」

ハル 「邪というのは何も妖だけじゃない。負の想いを持つものなら人にもきく」

由花 「私が吹いてもきくの？」

ハル 「いや、僕は桜の木の化身で、ご神木と近い存在だから力を引き出せている。他の者には無理だろう」

由花 「くー」

ハル 「いつまでそこに突っ立ってるつもり？」

由花 「横座っていいの？」

ハル 「いや、座れとは…」

ハルの言葉を最後まで聞かずに横に腰掛ける由花SE…歩く、木の板に座る

ハル 「…凶太い性格」

由花 「でもこんな時間に仕事って守人も大変だね」

ハル 「いつもはしてないよ。今は君がいるからね」

由花 「どういうこと？」

ハル 「夜は妖が活発になりやすい。もちろん君を襲った類のものもね。さすがに守人の住処に突っ込んでくる程の度胸はないけど、君の匂いを辿って庵の周りをウロついているのも多」

由花 「え、もしかして私のため！？」

ハル 「僕が目障りだから」

再び横笛を吹き始めるハル、その様子を横で見ている由花\SE：笛の音

由花\SE 「もしかして、毎晩やってたのかな…。だから昼間あんなに眠そうだったんだ」

由花 「すごくキレイな曲だね。なんていうの？」

ハル 「さあ」

由花 「知らないの？」

ハル 「昔…知人がよく口ずさんでいたものを、記憶を頼りに吹いてるんだ」

由花 「…あの、ハル、さん？」

驚きのあまり思わず笛を落とすハル\SE：笛落ちる

由花 「な、なに、その反応」

ハル 「君、敬称とか使えるんだね」

由花 「失礼な！イブキさんにはちゃんと使ってるじゃん！」

笛を拾うハル

ハル 「敬語は使えてないけどね。 気味が悪いから無理して付けなくていいよ」

由花 「本当？同い年くらいの子にさん付け、違和感あるから助かるー！私のことも由花でいいよ」

ハル 「図太いというより図々しいな」

由花 「あのね…ハル、色々ありがとう」

由花に疑いの目を向けるハル

ハル 「何が目的？」

由花 「私だってお礼くらい言うわよ！ タイミング逃しちゃってたけど、妖から助けてくれたこと、この家に置いてくれてること、こうして毎晩妖を追い払ってくれてたこと。本当にありがとう」

ハル 「…別に」

由花 「もーこういう時は笑って、どういたしましてとかでいいじゃない」

SE：夜風が抜ける

ハル 「どう、いたしまして」

由花\SE 「不器用に笑うその顔は、月の光に照らされて、ひときわ美しく見えた。初めて見たハルの笑顔を私はこの先、ずっと忘れることはないだろう」

由花の夢にて

美紗季 「進路希望出した？ えへ、今から高校生活楽しみだなー。二人なら絶対楽しいよー」

母 「由花、明日の三者面談、仕事終わったら行くからね」

俊 「見て見てー！俺、この前のテストでクラス一番だったんだぜ！」

由花 「みんな、私必ず帰るから…」

美・母・俊 「どうして何も言ってくれなかったの？」

SS…布団飛び起きる

由花 「っ！…！…夢…」

庵の庭にて

庭の掃き掃除を眠そうな目をこすりながらこなす由花SS…箒ではく

由花 「ふわあ〜」

イブキ 「おーおー若い子が口おっ広げて。みっともないぞ」

由花 「イブキさん」

イブキ 「おはようさん。寝れてないのか？」

由花 「んー、なんかあんまり良くない夢を見た気がするんだけど。そのせいか寝不足気味…ふわあ〜」

イブキ 「どんな夢よ？」

由花 「それが今一覚えてないんだよね」

イブキ 「それは残念。もしかしたら、嬢ちゃんが現世へ帰る糸口になったかもしれない」

由花 「いとぐちー？」

イブキ 「夢っていうのは、その人の願望や想いが色濃く反映されるからな」

玄関から現れるハル、二人を見つけ近づいてくるSS…玄関開ける、歩く

ハル 「由花、もうすぐここに客人がくる」

イブキ 「えっ！」

由花 「ここにお客さん？」

イブキ 「そ、そうだった。今からくるのは主様さ」

由花 「妖の親分ていう、あの？」

イブキ 「んで、俺たち守人の上役でもある。最近森が騒がしいからな。その辺りの話をするんだらうよ」

ハル 「主様が来ている間、自分の部屋にいるんだ」

由花 「お茶くらい淹れようか？」

ハル 「いい。君はこつちが呼ぶまで、主様の目に触れないようにするんだ。いいね」

庵に戻るハルSE：歩く、玄関開まる

由花 「なんであんなにピリついているの？」

イブキ 「ん、嬢ちゃんみたいなきた人間が迷い込んでくるっていうのは初なんだよ。だから主様がどんな反応するかわかんねえからな」

由花 「そうなんだ」

イブキ 「それより、お前さんらいつの間に仲良くなったんだー？名前呼びしちやって！きっかけ詳しく教えてよ〜♪」

由花 「イブキさん、おじさんくさいー」

由花の部屋にて

何もすることがなく、部屋に座り込む由花/SE：襖開閉、座敷に座る

由花 「部屋の中にとだいるっていうのもなー…ヒマだ」

ヒグミ 『こいつか……ひと…の子か…』

由花 「？ なに？」

突然聞こえた声に周りを伺う由花。どこからともなく古びた丸い鏡が転がってくる/SE：転がる

由花 「な、なに、どつから出てきたの…？」

その鏡を恐る恐る覗き込む

由花 「かがみ？」

SE：水滴が滴る/由花が顔をあげるといつのまにか周囲は森になっていた。

由花 「え、森？なんで！？私部屋にいたはずなのに…」

SE：獣の咆哮

由花 「ひっ！あ、妖？とりあえず隠れなきゃ！」

草むらに身を隠す/SE：草、獣の唸り声

由花 (S) 「うわっている！こつからどうしよう…あ、ひと？」

数匹の妖たちの前に毅然と立つ山の主

主 「ふむ…まったく。無粋な輩じゃの。久方ぶりに自分の庭を散歩してみたら、粗野な獣の如きその咆哮。一気に興が削がれたわ」

主 「言葉さえ理解できぬか…。なれば、せめてもの情け。ほれ、ささやかな炎でも呉れてやろう」

山の主から放たれた炎を妖たちを包み込む。その光景に驚き尻餅をつく由花

由花 「きゃあー！」

主 「うん？」

山の主の気が逸れた瞬間、妖の一匹が逃げ出す

主 「一匹逃したか。大した逃げ足じゃの。さて」

由花 「あいたたた…」

主 「その者、いるのはわかっておる。出てくるがよい」

由花 「ば、バレてる…。うゝ仕方ない…」

恐る恐る草陰から山の主の前へ出る

主 「これはまた。可愛らしい童がでてきたものじゃ」

由花 「あ、あなたは一体何者？」

主 「可笑しな話じゃの？盗み見ていた者が、誰何(すいか)の声をあげるとは」

由花 「うっ…」

ゆっくり近づいてくる山の主

主 「ハルの庇護を受けているという迷魂とは、そなたであろう。話は聞いておる」

由花 「ハルと知り合い、なんですか？」

主 「よく知っておる。して、そなたの名は？」

由花の目の前に立ち、顔を近付かせてくる山の主に緊張する由花

由花 「安宅、由花」

主 「ゆうか…ふーむ、面構えによく似合っておる」

由花 「めっちゃ見られてる。でも目をそらせない…」

森の中から飛び出してくるハル、イブキ

ハル 「主様、こんなところに…。(由花を見て)！なんで君が…」

イブキ 「あーあ、先に会っちゃったか」

由花 「ハル、イブキさん」

ハル 「部屋にいろと言ったじゃないか」

由花 「いたよ！？でも急に鏡が転がってきて覗いたら、いつのまにか森にいて…」

ハル 「鏡？」

主 「そう怒るでない。妾がヒグミに呼ばさせたのじゃ」

山の主の後ろにいつの間にか現れたヒグミ

ヒグミ 「「イツヒヒヒヒ」」

イブキ 「げえ」

由花 「頭が二つ!?」

ヒグミ 「小汚い人間の小娘め!」「かわいいお嬢ちゃん」「ワシの鏡を通らせてやったんじゃ!」

「鏡の力でここまで来てもらったのよ」

ハル 「なぜ、わざわざそのようなことを」

主 「なぜも何もお主らがおつては、由花とゆつくり話すこともままなるまい」

イブキ 「いつの間にな前まで…」

ハル 「別に主様のお手を煩わせることでは」

主 「(遮って)妾はこの森を統べる者として、迷い込んだ者を見極める義務がある。違うか、

ハル

ハル 「…」

イブキ 「それで主様の目にはどう映ったんですか?」

由花 「あ…」

SE:扇を広げる

主 「ふむ、特筆して問題ないだろうて」

ヒグミ 「人間を森に置クなんて汚れが広がる!」「妖に影響がでないか心配だわ」

主 「お主らの人間嫌いは理解しておるが、妾の決めたことに異を唱えるつもりか?」

ヒグミ 「ぐぬぬぬ…」 「はあ…」

イブキ 「よかったな、嬢ちゃん」

由花 「(お辞儀しながら)ありがとうございます! あ、主様に聞いてもいいですか?」

主 「お主が門を通れないことについてか?」

由花 「はい。ハルたちは、私が現世へ帰りたいって思っただけだからだ。でも私思い当たる

ことなんて何もなくて…」

主 「思い当たることはない?ふ、ふふ…あははは!ほんに人間というものは不器用な生き物
じゃのう。由花、ここは現世と常世の境、己の魂が浮き彫りになる場所。答えはお主自
身が持つておる。ただ、目を背けているだけじゃ」

由花 「私が目を背けてる?」

ヒグミ 「「主様」」

主 「わかっておる。まったくうるさい奴め…。さて、用向きは済んだことだし、妾は帰ろう」

イブキ 「そういえば主様、迎えに行かせたテンの奴どうしました？」

ヒグミ 「あのスズメ、時間に遅れてきおって！」「急いで飛んできてくれたんだけど」「阿呆にも速度が出すぎて、自分で止まらず、その勢いで」「ぼーんと主様の豊かなお胸へ」

イブキ 「おいおい…」

ヒグミ 「丸焼きにして食ろうてやろうかと思つたが」「さすがに可哀想と主様が」

主 「木にくくりつけての磔で勘弁してやったのじゃ」

イブキ 「はは、本当すんません…」

由花 「それで勘弁してもらえてよかつたね」

ハル 「馬鹿すぎる」

主 「由花」

由花 「はい！」

主 「残された刻はそう長くない。帰りたいのなら早く見つけるのじゃぞ」

去っていく森の主SE：歩く、鈴の音

由花  「山の主様。ハルとは違う、触れたら切れてしまいそうな美しさを持った妖。主様が言った、答えは私自身が持つてる、ただ目を背けているだけ。その言葉が、ひどく重たく私にのし掛かった」

7.

あなたの言葉がただ真っ直ぐで

ハルの庵、台所にて

朝ごはんの準備をしながら考え事をしている由花<留>：料理の音

主 『答えはお主自身が持つておる。ただ、目を背けているだけじゃ』

由花 「目を背けてる…。って言われてもさー」

ハル 「ずいぶん大きい独り言だね」

由花 「うわ！なんだハルか…。気配消して後ろに立たないでよ」

ハル 「君がぼーっとしてるからだろ」

由花 「森の見回りご苦労様。どうだった」

ハル 「特別変わったことなんてないよ」

お茶の準備を始めるハル<SE>：茶器の音

由花 「あ、お茶入れるよ」

ハル 「これくらいできるからいいよ」

二人のやりとりをニヤニヤしながら後ろから見ていたイブキ

イブキ 「あ、お茶入れるよ。これくらいできるからいいよ……くうー！なんだよ、その夫婦みたいな会話！青い春通り越して所帯染みやがって！でも、そういうのもいいと思うぞー
ー！！」

ハル 「人の家でうるさいんだけど」

由花 「イブキさんいたんだ」

イブキ 「やっぱ、若い男女の同居いいよな！浪漫だよな！！」

ハル 「由花、イブキに朝餉(あさげ)出さなくていいから」

イブキ 「おいおい、照れくさいからってそんなことばかり言っていると、嬢ちゃんに愛想尽かされ……」

SE：笛の音

イブキ 「痛い痛い痛いってー！！！！」

居間にて

朝食をすすめるハル、由花

由花 「イブキさん、無理やり追い出して、ちよつとかわいそうじゃない？」

ハル 「全然。全く。これっぽちも。毎回、食事の無心をしていくんだ。あれは立派なたかりだよ」

由花 (S) 「わかりやすくイラついてる……」

配膳の中にあるおかずを目を向ける由花

由花 「あ、ねえ、不思議に思ってたんだけど、ハルが唯一作れるそのおひたし？的なそれって、誰かから教わったの？」

ハル 「どうして？」

由花 「だってハルって家事能力低いじゃない。掃除も洗濯も雑で、お茶も満足に入れられない。でも、それだけはちゃんと食べられるから」

ハル 「君も言うようになったね」

由花 「イブキさんとか？」

諦めたようにため息をつき、箸を止めるハル

ハル 「…昔、まだ僕は意識もはっきりしない、不安定な存在だった。僕の本体は現世にある桜の木で、その周りをウロウロすることくらいしかできなかった。そんな時に、一人の人間に会ったんだ」

由花 「え、見えるものなの？」

ハル 「見えない。ただ稀に目のいい人間がいる。主様たちが言うにはそういう人間を『見鬼(けんき)』と呼ぶらしい。普通は山の中で一人でいる奴を怪しむだろうけど、あの人は慣れているのか妙に親切だった」

?? 「あんた、もしかしてこの桜の木の子かな？どうりで桜の花みたいな綺麗な髪色だよ」

ハル 「それから頼んでもいないのに、僕のところへちよくちよく来るようになって、いろんな話を聞いた。人間には家族というものがいて、みんな家で住む。それらが集まって村や町ができる。人が集まるととても賑やかで楽しいって。それから…」

?? 「名前ないの？それは不便だねー。んーじゃあ『ハル』はどう？春が来るとあんたは咲くから『ハル』！」

由花 「へーハルって名前、そこから来てるんだ！あ、もしかして前に言ってた、笛で吹いてる曲もその人から？」

ハル 「そう。これも日持ちするから、僕の所に来るときはいつも持って来てて、僕がよく食べるものだから作り方まで教えてくれたんだ」

由花 「いい人だね。その後もよく会ってたの？」

ハル 「突然来なくなった」

由花 「え」

ハル 「ある夜、その人がいつも来る方向の空が、赤々と染まっていた。山の妖たちは『戦が始まった』て口々に言っていた。それ以来会うことはなかった」

由花 「……」

ハル 「もう大昔の話だ。…ただ、たまにあの人のことを思い出すと、無性にこれが食べたくなくなるんだ」

由花 「そうなんだ…」

庵の庭にて

庭の掃き掃除をする由花(SE:箒ではく)

由花 「男の子と二人っきりで暮らしてると知ったら、お母さん倒れそう。美紗季もびっくりしすぎてパニックになりそうだなー」

空を見上げる由花。その空からは今の季節は読み取れない

由花 「…みんな元気にしてるかな。(涙ぐむ)ツダメダメ！絶対に帰るんだから！」

SE：草を踏みしめる

由花 「だれ？」

森側に立っているハル

由花 「ハル？いつの間外に出たの？」

ハル 「こつち」

森の中へ歩いていくハル/SE：歩く

由花 「ちよ、ちよつと！ もう、待ってよ！」

箒をその場においてハルの後を追いかける/SE：箒おく、駆け出す

森の中にて

ハルの背中について歩く由花/SE：葉が擦れる、歩く

由花 「ねえ、どこいくの？まだ歩くの？」

ハル 「もう少し」

由花 「もう少しも少しってそればっかじゃん…。いつもは、君みたいなノロマは森をむやみやたらに歩き回らない方が得策だよ、とかいうくせに」

突然立ち止まるハルの背中に顔をぶつける/SE：立ち止まる、ぶつける

由花 「ぶ！急に止まらないでよ…」

ハル 「…」

由花 「ただの森だけど、ここが目的地？ ねえ、は…は…？」

目の前のハルの体が異様に變形していく様をみて後ずさる由花/SE：体が砕ける系

ハル・妖ニ 「カワク…カワク…オマエヲ…」

由花 「うそ…」

妖ニ 「クワセロツ…！！！」

ハルの姿から完全な異形の姿に。その場から駆け出す由花

由花 「っ！！！」

妖に足を掴まれ転ぶ/SE：掴む、転ぶ

由花 「あっ！！！」

妖にのし掛かれ、牙を剥くその顔を両手で掴みなんとか抑える/SE：獣の唸り声

由花 「ぐうっ…！！！」

由花 (S) 「ダメだ、このままじゃっ…殺される！」

SE：獣の唸り(近づく)

由花 「助けてっ…ハル！！！」

切り裂くような笛の音に悶え苦しみ始める獣、そこを追い立てるように風が妖を襲う。S：笛の音、獣の鳴き声、風

ハルとイブキが現れる、イブキがトドメをさし地に伏す妖。S：走る、羽音、獣のうめき

イブキ 「お前は寝てる！」

S：大きいものが倒れる

由花の元へ近づく二人。明らかに怒っているハルの気配に小さくなる由花。S：歩く

由花 「あ、ありがとう…」

ハル 「無闇矢鱈に森に入るなって言わなかったつけ。それとも君の耳には綿でも詰まってるのかな」

由花 「あ、あの…」

ハル 「たまたま君の姿が見えなくなったのに気付いたからよかったものの、僕らが間に合ってなかったら」

イブキ 「間に合ったんだからいいじゃねえの。よく踏ん張ったな」

由花 「…うーごわがっただあー！！」

イブキ 「おーよしよし。天狗さんの胸でお泣きー」

ハル 「はあ、さっさと庵に戻ろう」

イブキ 「そうだな、一人で立てるか？」

由花 「うん…」

イブキとハルの後ろについて歩く由花。その背後で揺らめく妖。S：歩く

イブキ 「それにしても嬢ちゃんがないのに気付いた時のハル、面白い顔してたぞー」

ハル 「黙らないと笛、吹くよ」

最後の力を振り絞り妖が由花へ真っ直ぐ突っ込んでくる。S：獣の断末魔

イ・ハ 「！！」

由花 「？」

由花が振り返った瞬間、妖に飲み込まれる由花。S：何か閉じる音

ハル 「由花！！」

由花の意識の中にて

美紗季 「ねえ由花ちゃん、どこに進学するの？ あー、一緒だ嬉しいー！高校生になっても、たくさん遊ぼうね」

俊 「俺、塾に通いたいんだよね…。一緒に母さんに話してくれんの！？サンキュー姉ちゃん！」

美紗季 「え、違う公立の高校に進学するの？ そっか、由花ちゃんお家のことあるもんね。ううん、謝らないで！むしろ私こそ先走ってごめんね。でも…」

母 「本当はこっちの学校に行きたかったんじゃないの？ 家のことなんか気にすることないのよ」

俊 「姉ちゃん、第一希望の高校諦めたのって、もしかして俺が塾通いたって言ったから！？ 気にするなって、なんだよそれ…」

美・母・俊 「なんで自分の本当の気持ち言ってくれないの？」

SS：水滴の音

由花の部屋にて

布団の中で目覚める由花

由花 「…わたし…」

SS：起き上がる

由花 「妖に襲われて、その後…どうなったんだっけ」

布団から起き上がり居間へ向かうSS：襖開閉、廊下を歩く

由花 「ねえハル、え！？」

居間の襖を開けると主様とテン、イブキが座っていたSS：襖を開ける

イブキ 「お、やつと目が覚めたか」

テン 「バツキヤロー！お前なにやられてんだ！」

主 「顔色もいいようで何よりじゃ」

由花 「ぬ、主様！？」

イブキ 「まあとりあえず座れ」

SS：襖を閉める、座敷に座る

イブキ 「俺たちが追いついた後、妖に食われたことは？」

由花 「ぼんやりは」

イブキ 「そうか。のしたと思った妖が力振り絞って、お前さんの肉体を乗っ取ろうとしたんだ。最後の悪あがきってやつだな」

由花 「それでどうなったの？」

イブキ 「いわゆる取り憑かれた状態になって、意識不明の昏睡状態」

由花 「ええ！？」

テン 「そこで親びんの出番でい！」

主 「イブキは呪術、祓いの技に関して頭抜けておるからな」

イブキ 「すぐに追い出してやったさ。ただ、妖に憑かれるってのは、気力体力共に削られるからな。嬢ちゃん、丸一日寝てたんだよ」

由花 「そうだったんだ…ご心配おかけしました」

テン 「本当だぜい！今後親びんの手を煩わせるなよ」

主 「無事なら良い良い。それに元を辿ればお主を襲った妖は、先日妾が逃した奴じや。すまなんだな」

由花 「いえ！ わざわざ来てくれてありがとうございます」

主 「うふふふ、お主が心配というのもあるが、ここに来るとハルの愉快な姿が見られると聞いてな」

由花 「愉快？あ、そういえばハルは？」

テン 「さっき庭にいたぞ」

笑いを噛み殺しているイブキ

イブキ 「顔見せてやんな。あいつも心配してたからよ」

由花 「うん、ちゃんとお礼も言いたいし。主様、イブキさん、テン、本当にありがとうございます」

立ち上がり部屋を出る(出)：立ち上がる、襖開閉

主 「さて」

イブキ 「もう行くんですか」

主 「面白いものは見せてもらったしのう。ハルの奴、あまり人にのめり込みすぎなければ良いが…」

SE：襖を開ける

主 「もう遅いかもしれぬがの」

SE：襖を閉める

イブキ 「…そりゃあそうでしょうよ」

庵の庭にて

木の影にハルを見つけて駆け寄る由花(SE：小走り)

由花 「あ、ハル！ 昨日は助けてくれてありがとう」

背を向けたまま振り向かないハル

ハル 「もう起きて平気なの」

由花 「うん。すっかり元気！これもみんなのおかげ…」

ハルの正面に回ろうとすると、体ごとを顔を背ける(SE：背ける(ブイッ系))

ハル 「それはよかった」

ハルの姿に怪しむ由花

由花 「…うん。まさか主様まで来てくれるとは思わなかったけど」

SE:背ける(ブイッ系)

ハル 「主様は主様で責任を感じてたみたいだからね」

由花 「そうなんだ」

SE:背ける(ブイッ系)

ハル 「ああ」

由花 「ねえ」

SE:背ける(ブイッ系)

ハル 「なに」

由花 「さつきから何でこつちをみないのよ！」

SE:背ける(ブイッ系)

ハル 「気のせいだよ」

由花 「そんなわけあるかー！」

少年の腕を思わず掴む由花。その勢いで二人とも倒れこむ。SE:倒れる

由花 「いたた…。ごめん、思わず掴んじゃった。怪我とかない？」

ハル 「…もう、目を開けないのかと思った…」

由花 「え？」

うつむく少年とそれを真っ直ぐ見つめる由花。SE:ノスタルジー系

ハル 「倒れている君は、まるで人形みたいで…。話しかけても何も反応しない。まるで…」

由花 「……」

ハル 「もしかしたら、君の目が開かないかもしれないって。君が消えるかもしれないって怖く

なったんだ」

由花 SE 「こんなにも純粋な」

ハル 「君は怖い人だっ…」

由花 SE 「こんなにも純粋な言葉は初めてで」

顔に熱が集まるのを感じる由花。

由花 「っ！！！！」

由花 SE 「私はただ、初めて見る男の子の泣き顔を呆然と見つめることしか、できなかったのだ」

イブキ 「あいつは妖としての出生も少し特殊だし」

由花 「出生？」

イブキ 「…まあ別に俺が話したところでだしな。あいつが桜の化身というのは、知ってるか？」

由花 「うん」

イブキ 「長く生きた木だったから、徐々に力が集まって妖になりかたんだが、木自体が死んじゃまってな。生まれかけた魂が消えそうところに、主様がたまたま通りかかったんだ。んで、主様の力の一部をもらって妖として生まれた。それ以来、主様の下で働いているからあんなま世間ていうのをわかってねえんだよ」

由花 「じゃあ、ある意味主様がお母さんみたいな存在なんだね」

イブキ 「お前それ主様の前で絶対に言うなよ…」

ハルの自室前にて

ハルの自室に向かう由花〔SE〕廊下を歩く音

イブキ 『俺の予想は気恥ずかしくなったただけだな。初めての感情で扱いあぐねて、なかったことにしたいんじゃないの？』

部屋の前で仁王立ちする由花

由花〔SE〕 「なかったことになって何よそれ！」

由花 「いざ！ ハル、入るわよ！」

SE…襖開ける

ハル 「な、なに勝手に入って…」

由花 「ハル逃げるのやめて、ちゃんと向き合おう！」

ハル 「僕がいつ、何から逃げたっていうんだ」

由花 「今！そんなに私の前で泣いたのが悔しい？本音ばんばん出して恥ずかしかった？」

ハル 「な、な、なにを…」

由花 「そんなの私だって同じだから！初めて男の子泣くところ見たし、あんな真っ直ぐなこと言われて照れないわけじゃん！その上、私が現世を拒否してる理由がなんとなくわかってきたけど、ただ自分の本音を言えなくて気まずーいって思ってるだけって！こんな子供っぽい理由、私の方が恥ずかしいわよー！」

ハル 「ちよ、ちよっと…」

由花 「そんな私に自分の思ってること隠さないで全部言ってくれて、吹っ切れたの！私もこうすればよかったって、怖がらずにみんなと向き合えばよかったって！あんな風に言ってくれて嬉しかったのに…」

ハル 「…」

泣きながら力の入らない拳でハルの肩を叩き続ける由花

由花 「なんで本人がそれを否定するのよぉ〜！」

ハル 「…」

由花 「あんな態度取られて、私が傷つかないでも思ったの!？」

ハル 「…ごめん」

由花 「引きこもりもやしっ子ぉ〜」

ハル 「君の言っていることは時々よくわからないけど」

由花 「うわぁ〜ん!」

ハル 「確かに自分のことばかりで、君を傷つけたかもしれない。…本当にごめん」

由花 「私も叩いたりしてごめんねえ〜!」

ハル 「…君って本当に何をするか読めないね」

由花  「その日は声が枯れるまで泣いた。顔は目も当てられないほど酷い有様だったけど、気持ちはいままでになく、すっきりしていた。今なら私、あの門をきつと通れる……。だけどそれは、この世界との、ハルたちとの別れで…。この時、心のどこかがきしりと音を立てた気がする」

9.

君のもとへ

夕方、庵・居間にて

ハルとイブキ、テン、由花が居間で互いに向き合い座っている

イブキ 「門を通れない理由がわかった?」

由花 「うん、すっごくくだらない理由なんだけど」

テン 「それなら飛ばそうぜい!」

イブキのげんこつがテンの頭にめり込むげんこつ

テン 「きゅう〜…」

由花 「私、周りに合わせることはばかりで、自分の本音が言えなくて。それが周りを傷つけることになるって、全然気付けなかったの。そのことにずっと目をそらしてごまかしてた」

イ・ハ 「……」

由花 「だけどそれじゃダメだってわかった。ちゃんと正面から受け止める。理解してもらえないかもしれないけど、自分の想いをちゃんと相手に伝える。それがわかり合うってことだと思っから」

イブキ 「なんだか、娘の成長を目の当たりにした親の気持ちだねー。嬢ちゃんは号泣、ハルは薄笑いながら二人つきりしているとところを見た時は、とうとう頭のネジが飛んだのかと心配したが、丸く収まったならそれでよし！」

テン 「おいらはまだよくわかってねえんですけど、結局何がどうなったんですかい？」

イブキ 「テン、野暮なことは聞きなさんな。愛だよ、愛。な？」

ハル 「いや、別に」

イブキ 「照れるな照れるなー！」

ハル 「(無視して)それで門に行くんだろ？通るなら早いに越したことはないよ」

由花 「あ、うん！荷物まとめてくる！」

イブキ 「テン、手伝ってやれ」

テン 「へーい」

由花、テンが出て行く(留…襖を開める)

イブキ 「…んで、お前さんはどうするんだ？」

ハル 「なにが」

イブキ 「嬢ちゃんと一緒に行くのか」

ハル 「僕の記憶違いかな、あなたも僕と同じ守人だったと思ったけど」

イブキ 「はーい、立派な守人ですよ」

ハル 「自分の仕事を放りだすなんて、そんな無責任な…」

イブキ 「行きたくない、とは言わないんだな」

ハル 「…」

イブキ 「元々お前は人間に興味津々だったもんな。この庵なんて人の暮らしそのまんまだ。それに嬢ちゃんのこと嫌いじゃないんだろ？」

ハル 「…僕は」

イブキ 「現世とここは、そもそも時の流れが違う。人間は俺たちが瞬きする間に灰になっちまう」

ハル 「僕自身が保つかわからない」

イブキ 「そうだな。でもお前そこそこ生きてるんだ。守りに入ってないで、賭けにでてもいいんじゃないか」

イブキの言葉を最後まで聞かずに部屋を出るハル(留…襖しめる)

イブキ 「…意気地がねーの」

庵の庭にて

イブキ 「お待ちどうさん」

ハル 「準備は？」

由花 「ぼっちし！というか、いつでも帰れるよう準備してたんだよね」

テン 「抜かりねーな」

イブキ 「いやーいなくなっちゃまうかと思うと、寂しいもんだな」

テン 「本当に通れるんですかねい？」

由花 「たぶん大丈夫！（ハルに向き直って）…あのね、ハル」

ハル 「なに、改まって」

由花 「一つご相談です。私と一緒に現世に行きませんか？」

由花の突然の申し出に呆然とする三人

ハ・イ・テ 「は？」

由花 「私と一緒に現世に行きませんか？」

イブキ 「き、聞こえてる聞こえてる！（首を傾げながら）あー…一体どういうことだ？」

由花 「ちよつと前から考えてたんだけど、ハルの昔の友達探してみない？」

ハル 「なに言ってるの。あの人はとづくに…」

由花 「（遮って）亡くなってるのはわかってる！人間はそんなに長く生きられません。私もそこまでバカじゃないよ。ただ、どんな人で、どんなところで暮らしてたのか。本当に戦で死んじゃったのか。そうじゃないのなら、どうしてハルの所に来なくなったのか…ハルだつて気になってるんでしょ？」

ハル 「それは…」

由花 「なら、こつちから調べてすっきりしようよ！…それに、私が生きてる今の現世をハルに見てみてほしいの。私の持つてるものとか、街の話に興味持ってたじゃない？ずっと守人の仕事しかして来なかったんだから、有給休暇ってことで」

テン 「ゆうきゅ？」

由花 「ね、どうかな？」

イブキ 「…くく、あーはっはっはっ！面白い子だと思ってたが、ここまでとはな！！いやー嬢ちゃん、実は一番の大物かもな」

由花 「え、もしかして私変なこと言った…？」

イブキ 「妖に現世行きを誘うなんて、まともじゃねえよ。でもいいじゃねえか」

ハル 「イブキ！」

イブキ 「ハル、女にここまで言わせたんだ。男ならお前もいい加減腹を括れ。…お前自身はなにを望む？」

由花 「…」

ハル 「…鈍間で図太くて図々しい。おまけに短絡的思考で勝手に行動しては、面倒ごとを起こす。はつきり言つて君が来てから、こっちは気が休まった試しなんてない」

由花 「す、すいませんね」

ハル 「でも忙しない姿は見えていて飽きないし、料理の腕は確かだ。それにあの人を探すなら、現世の住人である君の助力は必要不可欠だ」

由花 「それって…」

イブキ 「(満足そうに笑う)…」

ハル 「君がそこまで頼み込んだ。…着いて行つてあげるよ」

由花 「ハル！」

ハルの頭をガシガシと撫でるイブキと不満そうなテン

イブキ 「まったく素直じゃねーなあ！」

テン 「お前がいない間、仕事増えるじゃねーかよー！」

イブキ 「よし！そうと決まったら善は急げだ！さつそと門へ行くぞー！」

由花 「え、ハルの荷物とかは？」

ハル 「僕は君みたいに貧乏性じゃないから」

由花 「あんたねえー！」

騒ぐ四人の側にいるまにかヒグミの姿、それに驚く面々…不気味

ヒグミ 「人間の小娘が調子に乗りおつて…」 「守人が職務を放棄するなんて…」

テン 「どうわー！ふ、双子ババアだ！…いい、いつのまに」

イブキ 「大方俺たち、というか嬢ちゃんの動向をあの鏡ですつと監視してたんだろ」

由花 「私！？なんで？」

ハル 「ヒグミは大の人間嫌いだ」

イブキ 「だから人が俺たちの領域に来ることも、逆に俺たちが現世に立ち入ることも大反対」

テン 「災いの元だとかなんとか騒ぎまくって気味が悪いんだぜい…」

ヒグミ 「災いの種ならば…」 「狭間の森をでる前に」 「どちらも狩りとうろろ」

鏡が光ったかと思うと、四人の周りをたたくさんの妖が囲んでいる

SS…妖の唸り声、獣の唸り声…緊迫

テン 「はあうっ！親びん囲まれてますー！！！」

イブキ 「言われなくてもわかってる！」

ハル 「あの鏡、厄介だな」

由花 「あれで呼んでるの？」

イブキ 「しようがねえ。ここは先輩として、いっちょ一肌脱いでやるか。俺が道を切り開くから、お前らその隙に走れ」

由花 「イブキさん一人じゃ危ないよ!？」

イブキ 「おいおい嬢ちゃん、俺を誰だと思ってるんだよ」

テン 「俺たちの親びん、天狗のイブキさまませい!!」

イブキ 「その通りっ!!」

天高く舞い上がり、上空から災害を彷彿とさせるほどの強風を巻き起こす(留)強風、妖たちの悲鳴

イブキ 「今だ！走れ!!」

テンが先導して三人走り出す(留)羽音、走る

テン 「こっちだ！」

ハル 「由花、走れ！」

由花 「イブキさん！」

三人の後を追おうとする妖の前に立ちふさがるイブキ(留)妖・獣の唸り声、羽音

イブキ 「ここは通行止めだぜ。通りたきや、お前らの首を置いていきな！」

SE:羽音

森の中にて

複数の妖が森の中を闊歩する中、物陰に隠れている三人(留)妖・獣の唸り声

由花 「なんであんなににいるの？」

テン 「ぜってー双子ババアだ！あいつが鏡使って、おいらたちのことを森中に広めたんだ！」

ハル 「だろうね」

由花 「ハルの笛であいつら蹴散らせない？」

ハル 「できるけど、結構体力を割くんだ。この数相手に最後まで持つか」

テン 「体力なしめ」

ハル 「活躍の場が非常食しかない君に言われたくないね」

テン 「おいらは食いもんじゃあ、おいららどうかできるかもしれねえ」

由花 「本当!？」

カミ始めるテン

テン 「ぐぬぬぬ……でりゃあー!!」

テンが叫ぶと、その姿は由花のものに(ただし落書きのような顔と体の輪郭)SE:煙

テン 「どうだ、変化の技でゆうかそっくりになったろ！」

由花 「これが、わたし……？」

ハル 「変化の技が使えるなんて初耳なんだけど」

テン 「ふっふっふっ……そうだろうな……おいらも今の今まで忘れてたぜい！」

ハル 「ああ、そう……」

由花 「でも、その私もどきの姿でどうするの？」

ハル 「決まってるだろ、囧だよ」

由花 「え？」

テン 「お前が言うな……親びんからお前たちのこと託されたんだ。ここは俺に任せる！でりゃー!!!!」

妖たちの元へ飛び出すテン<SE:走る

ハル 「別にイブキは託してないと思うけどね」

テン 「ほーら、つるつるぺたぺた胸の私はこっちよー!!ついてらっしやーい!!」

走り出す由花(テン)を追いかける妖たち<SE:走る、妖・獣の鳴き声

由花 「あいつ……」

ハル 「今のうちの門まで行こう！」

現世への門・鳥居にて

SE:走る

ハル 「……ここまでは妖たちも来ていないみたいだ。今のうちに通ろう」

由花 「はあ、はあ、つうん！」

二人が近づくと鳥居の上に山の主の姿

主 「よくあの追っ手を撒けたものよ。二人の執念の成せる技か」

ハ・由 「!?!」

ハル 「……主様も僕たちを追って？」

主 「そうだ、と言ったらどうするのじゃ？」

一歩山の主の方へ踏み出すハル

由花 「ハル！」

SE：緊張感、見つめあうハルと山の主

主 「ふ、あははは！お主もそんな顔をするのだなー」

ハ・由 「？」

主 「いやすまぬ。妾は別に追いかけて来たわけではない」

ハル 「しかし、主様もヒグミと同じように、妖と人間は棲み分けるべきと…」

主 「そう思うておる。だから、妾はこの森を作った。だがそれを他のものに押し付ける気はない」

ハ・由 「…」

主 「それ故お前たちの邪魔はしない。だが、助力もしない。妾はこの狭間の森を統べるもの。森にいる妖全てに平等だ。もちろんヒグミに対しても、だ」

ハル 「ありがとうございます」

主 「今宵ここに来たのは違う用向きだ。ハル、現世に行くということは、消えるかもしれぬ、という覚悟があるのだろうか？」

ハル 「…」

由花 「消える？なにそれ…」

主 「なんだ、言うておらんのか。ハルはかつて消えかけていた所を妾の力を吹き込むことで、生き永らえたのじゃ。つまり妾の力が及ばぬ現世に行けば、今度こそ消えるやもしれぬ」

由花 「うそ…」

主 「まあどうなるかは賭けじゃの。もしかしたらハルの魂は、己の力のみで形を保てるほどの力を蓄えておれば、あるいは…」

由花 「そうなの、ハル？」

主 「ハル、お主に問う。本当に現世へ行くのか？ 賭けに負ければ、どこぞの異国にある寝物語のように、泡となって消えてしまうかもしれぬ」

由花 「ハル…」

主 「…それでも行くか？」

SE：風が吹き抜ける

ハル 「それでも、僕は現世へ行きたいんです。 由花と一緒に！」

由花 「ハル！」

由花の手を取り走り出す。迷わず一人とも鳥居を潜る。それを見送る山の主SE：走る、飛び込む系の音

主 「そうか、やはり走るか…」

二人、山の道を走りながらSE…走る

由花 「ハル！ほんとに、いいの？消えちやうかもって」

ハル 「全部今さらだよ」

由花 「でもっ」

ハル 「僕は後悔してない。この道を選んだことを、絶対に」

由花 「…うん！」

昼の森にて

由花を心配そうに覗き込むハイキングのおばさんたち

おばさん 「ねえ、大丈夫？どうしよ、目開けない…」

由花 「…うう…」

おばさん 「ちよつとちよつと、ほら！」

おばさん 「あーよかった！どつか痛い所ない？自分のことわかる？」

由花 「…わたし…」

おばさん 「あんた行方不明になってた子でしょ？いま救助の人が来るわよ」

由花 「…は、ハルは…？」

おばさん 「はる？なんのことかしら」

起き上がり、周囲を見回す由花。周囲の木は紅葉で色付いていたSE…起き上がる、落ち葉が舞う

由花 「っ、ハル…？あの、私と同じ年くらいの男の子、いませんでした？髪も肌も白くて、着物着ててっ！」

おばさん 「さあ、ねえ見た？」

おばさん 「私も見てないわね。あなたここで一人で倒れてたのよ。この桜の木の下で」

由花 「え…」

由花が見上げると紅葉の中、一本満開の花を咲かせる桜の木があったSE…和風

おばさん 「こんな秋に珍しいわよね。狂い咲きっていうのかしら」

おばさん 「でもこの木のおかげで、あなたを見つけたのよ。まるで、あなたがここにいてることを教えてくれてるみたいで」

ハル 『まだ食べてないの？そんな鈍間(のろま)だから異界に迷い込んだりするんだよ』

ハル 『…泣ける時に泣いておいたほうがいい。じゃないと涙が存在する意味がない』

ハル 『…君って本当に何をするか読めないね』

ハル 『僕は後悔してない。この道を選んだことを、絶対に』

由花 「っ！！(たまらず泣き続ける由花)」

山桜の下にて

桜の蕾が膨らむ頃、一人木の下に佇む由花。この桜の花だけは全て散ってしまったている(留…土を踏みしめる)

由花 「久しぶり！本当はもつと早く来たかったんだけど、私こっちでは数ヶ月いなくなってたみたいで…。現代の神隠し、とかなんとか騒がれちゃって色々大変でさー」

SE…木の梢

由花 「あ、そうそう、ちゃんとみんなに私の思ってること話したよ。どんな反応が来るか怖かったんだけど、みんな喜んでくれた。やっつと、私の本音が聞けたって。もつと大変なことかと思ってたけど、言ってみると案外楽だね」

SE…鳥のさえずり

由花 「狭間の森のことは誰にも言っていないんだ。信じてもらえなさそうっていうのもあるんだけど、口に出しちゃうともう二度と会えなくなっちゃう気がするんだよね…。ハルの友達、ちゃんと私が探すから！私が言い出しっぺだし、ちゃんと最後までやり遂げるよ」

SE…そよ風

由花 「っやっぱり、会えないの寂しいなあ。泣かないように、頑張ってきたんだけど…ここ来たらダメだ。…私、ハルに会いたいっ」

後ろからかけられる声(留…風が吹き抜ける音)

ハル 「ねえ知ってる。木に話しかけてる人って、世間一般では変人と呼ばれるんだよ」

由花 「！」

ハル 「あと、そういうのは本人に言ってくる？」

振り返って迷わず駆け寄り寄る由花(SE…走るM…ED曲)

由花 「ハル！！」

主 少し離れたところから見守るイブキ、山の主

主 「二人ともよき顔をしておる」

イブキ 「助力はしないんじゃないですか？」

主 「なに、あんなもの助力のうちにいらぬわ。すこーし、妾の魂を分け与えただけよ」

イブキ 「充分すぎると思いますか〜」

主 「…妾たちとは違う選択をした、あの子達の行く末を見たくなくなってしまったのよ」

イブキ 「…俺たちはあいづらみたいに選べませんでしたからね」

主 「さて、覗きもここまですて帰るか。ヒグミの機嫌を取ってやらねばならぬし」

イブキ 「テンも珍しく頑張ったようだし、ちつとは褒めてやりますかね」

由花 「ねえハル」

ハル 「なに？」

由花 「おかえり」

ハル 「ただいま」

(終わり)